



完鷗勺集

^ 5
2230



利5
2230
卷



完齋句集

新年之部

人邦の如く来りてゆく事ありき
源川の都は海にまはる日に出
る水は波は八景にたつ陽春
初雪のころなり葉も小り白く
あつらひの如く序をたてしる事

藤野深氏遺愛之記



明治二十一年四月五日
藤野深

夏玉也つひとくもあ、包く兼之

○ 春 夏 冬 今 昔 通 可 能 節 節

句心未

春之部

をう梅乃手くくへお取以き
内儀 前々中々事多節 梅の
待 除 少 人 山 山 山 山 山 山 山 山
即 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
昔 又 又 又 又 又 又 又 又 又 又
出 出 出 出 出 出 出 出 出 出

初花や友を遠く小石一葉も
上野まゝ、初花をうたふは
向島
一つふも降るる花のゆき
花と共小水を流るる月と花
むねも花のうたのうた
路中
花のうたのうた
花のうたのうた

終園北林

年少くも女子少きや花のうた

春湖洋のうたのうた

のうたのうた

明きて来し、桜ふ如に花

小金井小橋

夕月も花のうた、桜のうた

夏之部
うも外乃 一つるをさす、喜原
敷もあふ者如つる、給う部
部費不修り守る也部公
本一人も守る、敵こちへ、さす
日著の部
時

あら〜と勢の指子や 杜字
田舎の心もたはらぬ 不の歸
横小町 勢の巾着や 子規
指子おの 燈籠おうつ 茶揉ど
勢をさけや 心もさけ 杜の
初綱とこ 働きや 松魚子
ちらくとも ありて 遠入 田植り
卯の意あり 折り 垣やうら 表

日光山ヨク

薄う 阿ふ 影や 神も 佛と 表

郊行

那須ならも 馬を ぬらして 野を 卯月

二十三坂

黄鳥より 光る 水も つと 城寸坂や

玉塚

墓のふも や 今も ありて 宛と 詠

源川

是より夜の清や 水食
先づあふのさうさうのさうのさ
夕討ハコトハ 葉之節の夜世
大空よりあやこもりて 風を
帷子の仕立 袂のや 鈴のうち
あやこもりや 幸くあつく 廣同振
うきもあや神 小仕へる 女子達

白乞乃之舞ひ人 来りやち 柳
うらへもささき 藤ハ少少
野あふや 蝶あもる 春のあふ照

秋之部

之秋を司る神あり、

老情

被るる衣の色、

菊

散るる葉の音あり、

菊の香あり、

おとろくもさうしーくぬ一葉くね
物火のこもくや故城の御黄くし
阿まふ下やあましの枕の京音葉
秋垣や人ちるをねと 住持寸
高唐子老 唐ち古き竹秋のそ
唐ちあしう、 唐出来く秋のそ水
葉の春や古くゆしき 村 枕
こちやのにききぬあひさう 如即毛

おとろくもさうしーくぬ一葉くね
物火のこもくや故城の御黄くし
阿まふ下やあましの枕の京音葉
秋垣や人ちるをねと 住持寸
高唐子老 唐ち古き竹秋のそ
唐ちあしう、 唐出来く秋のそ水
葉の春や古くゆしき 村 枕
こちやのにききぬあひさう 如即毛

疎山も田輪も秋也、盃は月

白浪

七人合水も此下上利根の月
出たぞと志を志つて秋の月
浦月の根もさきさきありて
昔もさき人ふさきし秋の月
出た体もさきも高も月根に
昔田の果もさきと神と

草衣底叩くてこれ日ちと地
侍もさき海見らるる海へ
人衣もさき女もさき白の衣
任もさき女もさき白の衣
海へ飛ぶ解き人海へさき
高もさき海へさき白の衣
高もさき海へさき白の衣
秋の白もさきと海へさき

初のついでに好むも残衣の非
貴なる地を甲斐 細と
之は波小波の 山法巧冬村母

浅草寺

東の繁る人おは常の夕日に
散りての影小影の常うれ
よの東の心也数十里の冬末立
山茶の影 松の人の心不咲の心

障子うつ日新をわたりての腕
以て来しついでに寺の心 鶴 勢
てその影の心をわたりて 枯 居 是
枯やもきけの居 是の心をわたりて
途平より人の心をわたりて
手信も布圍の心やわたりて 縁
清の心やわたりて 印の心
今日より好むも残衣の非

新の春や、節を度、手袖さけり
志く、試の少く、まを、新の、白く、
澄き、うへ、道、さく、瀬、や、新、さ、
波、石、小、出、実、の、形、や、昔、さ、
こ、新、さ、う、さ、昔、清、ら、く、冬、の、梅
枝、を、う、さ、め、く、ひ、ぬ、形、や、巾、の、納
許、埋、出、さ、う、ふ、く、新、雪、さ、湖
里、こ、う、ら、表、さ、ゆ、や、雪、さ、垣、さ、ハ、里

千、尺、ひ、く、浦、ふ、さ、白、雪、さ、
は、ま、や、た、移、雪、ま、ふ、こ、大、根、河、岸
お、た、ね、う、ら、雪、あ、さ、う、こ、新、た、さ、
と、忘、さ、た、う、中、雪、も、た、う、う、今、

田原

手、ち、も、の、や、餅、と、山、石、も、抱、人、さ、
う、さ、三、や、年、の、歌、を、う、山、巾、の、人
身、皮、の、う、さ、う、や、雨、も、吹、さ、一、枝

粧

松やたききりや新るはる
夕影や海がくはて千松島

恋

登り人の神もひもいふを以て

朋友不信ありとて完臨相見の情あり
吾時人小定ること多あり相見そふ
まゝ細もく見とせば相見亦ふ
わく見と呼なり常小節義を重くし
善友あり幸己り秋相の一もふ
病を苦らぬりあはれもふ
か人志すもいふも中々いふ
かきん今も大祥意ふ方りぬ

遠藤子 恕不併書なり 其意を以てその
書ありて 進福集のりあるは 是れ不列人の
句集を以て 中々 撰集より 徳川子
不始らん といふなり 其意の 萬分なるを
ありし 本年より 父の 書を 改めし 玉葉
少く なる 一 函に 書不 一 函に 書あり
不 記し 跋に 完た 中の 小と なる

明治癸未秋 日 山崎つとむ 徳



全書 徳川子

鈴木氏藏

